

五段目・六段目の勘平

六代目 尾上菊五郎

〈出典：『芸』改造社、昭和22年10月〉

五段目の勘平

勘平の役はまともにすれば、裏門の駈付けから出ていますけれど、此場はあまり上演されないで略します。それから『旅路の花聳』の道行へ出ますが、これは院本にはない場面であり、『裏表忠臣蔵』を上演した時、三段目の喧嘩場の裏へ付けたもので、『新口村』の歌詞を借りた間に合せ物であったのだそうですが、清元の作曲がいいので八段目の道行の替りに、此方が大流行を来たした訳ですが、舞踊劇でもありますから、爰には省く事にして、五段目に就ての略型を話しましょう。

尾上家にとって、勘平は因縁の深い役で、初代以来ずっと演続して来ているのですが、取分け三代目梅壽菊五郎の工夫がすぐれていたのを、五代目が其型を写して、更に洗い上げて完成をした物です。それで五段目の勘平を勤める役者は、其着用の簑へ水を掛けて、大雨に濡れた様を見せる事になっていますが、五代目のはもう一層凝ったもので、此場の出る芝居の時には、男衆が楽屋へ入ると同時に、簑を楽屋風呂の中へ釣るして置きます。これが五段目の開く頃になると、シットリと全体に湿りが廻って、着心もよく又濡れた味が出る訳になるので、五代目の舞台の気の入れ方は、すべてが斯う云う風に行届いていたものです。

此五段目の舞台は、普通向う一面田畑の遠見の書割、其前に藪疊、真ん中に松の大木と云う事になっています。幕明きの鳴物は雷鳴と雨の音で、これはいずれも大太鼓を使用して、其裏表で音色を打分けます。此場の勘平は始めから板付きで出ているのです。

幕が明くと、舞台真中の松の木の下に、勘平が股を割った形で切株へ腰を掛け、左膝に鉄砲を突いて肩へ寄せ掛け、右手の竹の子笠は雨を避ける心に斜に持ち、顔の前へ翳して雨止みしている体、義太夫の〴鷹は死しても穂はつまず……誰水無月と白雨の、晴間を爰に松の蔭』の間、『晴間』の文句で笠を右へ上げて始めて顔を見せ、一寸形を整えて立上ると、〴向ふより来る小提灯、これも昔は弓取の、燈火消さじ濡らさじと』で花道から千崎弥五郎が、黒塗の陣笠、白木綿の向う鉢巻、裁付袴、黒羅紗の柄袋の掛った大小を差し、草鞋履きで簑を着て、手丸提灯を持って出ますが、此場面を『濡れ合羽』とも云う位で、勘平の簑に対しても弥五郎は青漆の合羽を着るのが本格でしょう。勘平はこれを見て、あの提灯で火を借りようと云う心に頷き、下手の松の木の蔭へ後ろ向きに立って、笠で顔を隠して待っていると、弥五郎は舞台へ掛って、ずっと行過ぎるので『イヤもうし、御無心乍ら、火を一つお貸し下され』と云って、左肩に鉄砲を担ぎ、右手に笠を持った儘、上手向きで下手に蹲むと、弥五郎は刀へ手を掛けて身構え、『此街道は物騒と、聞いて合点の独旅』云々と云います。勘平『成程、盜賊とのお目違ひ、御尤千萬、我輩は此

辺の獵人でござるが、先程の大雨に、ほくちも湿り難儀至極』と云って、笠を裏返しにして下に置き、『鉄砲貴殿へお渡し申す』と鉄砲を弥五郎の方へ向けて前へ置き、『自身にうつしてお貸し下され』と云う。弥五郎は少し下手へ進み、提灯で勘平の顔を照らして見て『和殿は早野勘平ならずや』と云う。勘平は向合って弥五郎を見上げ、『左言ふ貴殿は弥五郎殿』。弥五郎『これは堅固で』。勘平『貴殿も御無事で』で、腰を浮かして一寸裏向きに前へ掛って、右で弥五郎を指し、その体を引いて、^{やや}稍正面向きに腰を落とし、『これはしたり』で右膝をポンと打ち、立上って^{かみしも}上下から寄って顔を見合せ、勘平は亡君の身の上を悔む思入れをして、顔を少し下手へ向け乍ら、又我が今の身の上に心付いて、斜下手向きに離れ、^{わずか}僅に首を垂れた加減に思入をして下手に蹲み、握った右の手を下に突き『面目もなき我が身の上、古朋輩の貴殿にも、顔を得上げぬ此仕合せ、武士の冥加に尽きたるか、殿判官公の御供先き、御家の大事起りしは、是非に及ばぬ我が不運、其場にも有合さず御屋敷へは帰られず、所詮時節を待って御詫びと、思ひの外の御切腹、(時代に)南無三宝。これ皆師直奴がなす業、せめて冥途の御供と、刀に手は掛けたれども、何を手柄に御供せん、(自分を指し)どの面下げて言訳せん^{たしな}と心を砕く其折柄。(小声に気を替えて)密に様子を承はれば、由良之助殿御親子、数右衛門殿を始めとして、殿の鬱憤晴らさん為』と云うと、それまで上手の捨石に腰を掛けて聞いていた弥五郎が、四辺へ心を配る科がある。勘平はそれに心付かず、『寄り寄りの思し立ちあるとの噂、我輩とても御勘当の身と云ふでもなし、手掛り求め由良之助殿^{たしな}対面遂げ』と云うので、弥五郎は『コレコレ』と小声に勘平を^{たしな}窘める。勘平は尚も心付かずに、『御企の連判に、御加へ下さらば』と云うので、弥五郎が『コレサコレサ、これさ勘平。はて^{きて}扱御身は身の言訳に取紛れ御企の連判などとは何のたは言、左様の噂かつつて御座らぬ』とあたりへ聞こえよがしに言うので、勘平は一寸^{ためら}躊躇って、そんな筈はないがとの思入をし乍ら控えます。弥五郎は、亡君の御恩を思う人々を選り出す為、『御用金を集むる其御使ひ、態と大事を明されず、誠亡君の御恩を思はば、ナ』と云って、四辺を見て傍へ寄り、裏向きに囁くと、勘平は前向きの形で聞取り、弥五郎は元の捨石に腰を掛ける。勘平は喜こびの科あつて両手を突き、『ハ、ア忝けない、弥五郎殿、成程石碑と云ひ立て、御用金の御企ある事、疾くより承り及び』で膝に両手を乗せ、『某も何卒して御用金を整へ、それを力に御詫びと、心は千々に砕けども、弥五郎殿恥かしや、主人の御罰で今此様、誰に斯うとの便りもなし、され共軽が親、与市兵衛と申すは^{たのも}頼母しき百姓、我々夫婦が判官公へ、不奉公を悔み嘆き、何卒して元の武士に立返へれと、翁嫗共に歎き悲しむ、これ幸ひ、御辺に逢ひし物語、段々の仔細を語り、元の武士に立返へると言ひ聞かさば、僅の田地も我子の為、何しに否やは申すまじ』と云って、一寸考え、右の指を折数えて『明々後日は金子たんぞく仕り、貴殿へ御手渡し仕らん、何卒堀部氏へ御取次を、^{ひとえ}偏に願ひ奉る』で、握った両手を下に突いて辞儀をする。弥五郎『暫くお待ち下され、明々後日は必ず御返事』云々の捨台詞を言い乍ら、懐紙と矢立を取出し、堀部の旅宿書を^{したた}認める。此間に勘平は、前に置てある弥五郎の提灯を左手で引寄せ、鉄砲の火縄に火を移し、又提灯を元の処へ戻す。弥五郎『これが即

ち堀部氏の宿所でござる』と云って渡す。勘平は受取って戴き、一寸見て懐中に入れ乍ら、『重々の御世話忝けなう存ずる、又拙者が宅をお尋ねならば、此山崎の渡し場を左に取り、百姓与市兵衛とお尋ねあらば、早速に相知れまする』（弥五郎が与市兵衛の宿所を帳面へ記入するのもある）など言い乍ら辞儀をして、兩人立上り、勘平は左へ鉄砲を担ぎ、右手に笠を持った儘『アイヤ弥五郎殿、此行先きは猶物騒、必ずともに御油断めさるな』と注意をすると、弥五郎は『なにさなにさ、石碑成就するまでは、^{のみ}蚤にも喰はさぬ此体』と絃に乗って言い、砕けて『御辺も堅固で、御用金の便りを待つぞ』と云う。勘平が『左様ござらば弥五郎殿、お別れ申す』と向合って辞儀をし、雨音の鳴物になり弥五郎は上手へ入る。勘平はいそいそと嬉しい心持で花道の付際まで掛ると、風音を劇しく打込み、雨を避ける心で、笠を顔の前から上へ上げ乍らたじたじと後へ下り、鉄砲の火縄を濡らさぬよう笠で一寸覆い、改めて笠を右の上へ上げて極り、それを顔の前へ翳して向うへ入る。跡浅黄幕を振冠せて、雷鳴と雨音の鳴物でつなぎます。爰までが『鉄砲渡し』で、道具が出来次第知らせに就き、浅黄幕を切って落します。

舞台は一面の黒幕、稍上手へ寄せて高く幅広なる掛稲、その後ろに藪畳を並べ、下手寄りに松の立木、これに掛藁が掛けてある^{あつらえ}詠です。場幕から与市兵衛が出て、いつもの通り定九郎に殺される^{くだり}件があって、猪が出て、定九郎は鉄砲で打たれて倒れて^{しま}了うと、^し猪打留めしと勘平は』で、勘平は鉄砲の筒先の方へ左手を掛け、右手で元の方を抱込んで揚幕から駈出して出て、花道の中程で右の膝を突いて左足を前へ踏出し、鉄砲を肩まで上げ、新規に狙いを付けてドンと放し、その反動の心で鉄砲の台尻を体毎後へ引いて突き、右の足から揃えて立上り又左足を前へ踏出し、股を割って、一寸左に掛った形に構え、『トチ、ン』の絃に当って、首を三つに舞台の方へ送り、直って左足から揃えて、束に立つと同時に鉄砲を左の肩に担ぎ、右の手に火縄を取り、道を照らす心に上げて、これを輪形に振廻し乍ら、四辺を透して見る形に歩いて舞台へ掛り、表裏と足で探る心に寄り、下手寄り

に立っている松の木に下手から正面に当り（此時松の木の後ろに備付の竹筒の水の中へ火縄を入れて消す）雨の雫で火縄を消した心で正面になり、猶二三度火縄を廻して見て、火が出ないので、一寸首を傾けて不審の思入をして、担いでいる鉄砲の元の方へ火縄を二三度打付けても、尚火が出ないので一寸松を指し、『ア、』と口を開いて頷き、雨で消えたのだと心付いた思入をし、火縄を鉄砲へ付け、右の肩に担ぎ替え、探り足ですり寄り、左の手で松に障り、手さぐりで松の木だと云う事をたしかめ、これで火縄が消えたのだと云う思入があって、^{きわ}扱何かないかとの心でもう一度探り、掛藁が手に当るので左手で取り、左の足を踏出して、左に持った藁を上から下へ三度に水を切る心に振下ろし、担いでいる鉄砲の筒先が松の木に当るので、松を見当に右足から少し前へ出て、藁を下に置き、筒先を上手へ向け、鉄砲を抱き込むような形に持って、体毎その上へ載せ、立上って山刀を鞘ごと抜いて正面を向き、左の足から踏出して屈み加減になり、左で刀の^{こじり}鑑が地面を摩るように上の方へ、一つ探り今度は裏向きになって右足から踏出し、刀を右に持替えて、

同じ形に一つ上手へ探り、又正面になって左足を踏出して刀を左に持替え、同じ形に上手へ一つ探り、倒れている定九郎の右の足へ鐙が当るので頷き、裏斜になって股を割って、山刀を両手で振上げ、定九郎の腹の辺を力を入れて三つ打ち、改めて正面を向き、左の足を踏出して右に掛り、右の手に持った山刀を左の裾へ当て、左の手を掛け添えて、体を引き乍ら三つに拭き上げ、その刀を差してから、腰に付いている縄を右手で取出し、左足を前へ踏出すと同時に、縄の端を右の手に残して前へ投げ出して、右に掛り、左の手で其縄を右手の折った腕から手首に巻付ける縄捌きをして、それを外して口に咬えた儘、その端を取って両手で輪の結びを作り、右の足から裏向きに摺寄り、又左の足から表向きに摺寄って、左の足で定九郎の右足に障り、正面で束になって、結んだ輪を大きくして腰を屈め、定九郎の右足へ掛ける科を二度繰返えして外し、三度目に掛けて三つに手繰り上げるので、足首の輪が締る。そこで股を割って、縄を両手で一度引上げて、目方を引く科、もう一度同じ科をして一寸考え、今度は腰をもう一杯落して、早目に同じ科を二度して見て、不審の思入があり、次ぎに右の手で縄を握り、左の手で縄を下へ抜き乍らずと蹲んで、定九郎の足の先へ両手を掛け、指に障って吃驚し、両手を後ろへ軽く突いて腰を落した驚きの形、すぐ体を起して定九郎を右手で指でさし、『コリヤ人』と云って、逃げ腰にツカツカと斜に下手前まで来て、左の膝を突いて右の立てた膝に掛り、両手を打違えのように重ねて口を押え、四辺へ気を配る心に絃に当って、顔から体を追々に下手へ返し、それから膝で這うような形に手で探り寄って、元の定九郎の処まで戻り、『コレ旅人、旅人』と、呼活ける心で大きく言い、心付て上下を見返し、口の中で『ト、ト、飛んだ事をした』と云って、定九郎の体を両手で探り『ク、ク、薬はないか、ク、ク、薬は……』とこれも口の中で言い乍ら、薬を探す心で懷中に手を入れ、何かあるという思入で、財布を引出し、両手へ受けて、目方を引いて見て、金財布なのに驚き、これを手から離して下手へ這うように逃げ、松の木へ手で当り、其前に置てある鉄砲を、筒先を上、其方へ右を掛けて抱込み、花道のスッポンの所まで行き、左足を踏出して、それを又一つ跡へ引き、及び腰に前へ掛る形に止り、じっと思入があつて右足を引いて束に立ち（此所まで脛に当る事）、向うをじっと見て、鉄砲を左へ抱え、右の手で『あの金を御用金に……』と云う思入、右手で目方を引く形をして、『弥五郎に渡さうか』と云う心で、一寸向うを指して右足を上げ、ポンと膝を打って頷き、左の手を下に、右を筒先の方へ掛けて、鉄砲を抱込み、探り足で急ぐ心に元へ戻り、背中で松の木に当り、鉄砲を以前の処に、今度は元の方を上手向きに置いて、定九郎の処へ摺寄り又探って見て、財布を左の手で取って行こうとすると、財布の紐が定九郎の首へ掛っているの、死骸が起上る勘平はそれに引かれて、二度計り行き兼る科をして上手向きになり、左の手に財布を持ち、右の手で『濟まないが此金を貸してくれ』という心で、片手拝みをして正面に直ると同時に、財布を右手に持替え、左で刀の鯉口をくつろげ、財布の紐を切るの、定九郎が倒れる。勘平もそのはずみで斜上手向きに尻餅を搗き、両手を後ろへ突き、右の足を折って左足を投出した形に極り、財布を懷中し、それから鉄砲の処まで這って行き、左を上、右を下に鉄砲を斜に抱え

て、つかつかと花道のスッポンまで行って躓^{つまず}き、右の足を踏出して止るのが木の頭、その形の儘左右へ躑^{よろ}け乍ら、暗闇の中を駈ける心に向うへ入る。二度目の木に就き道具が廻るという段取りです。

これから六段目になるのですが、其仕料^{しきりょう}の一々に^{すこぶる}願^{ねが}苦心が多いので、別に『六段の勘平』の型の項を設けて、相当くわしい話をしたいと思えますから、爰には略して前半だけにして置きます。

六段目の勘平

今度は五代目^{おやじ}の得意芸の話に移りましょう。私の口から云うのはおかしいのですが、私の目に見覚えているだけでも、実にうまいと思った物が幾つもあって、^{とて}逆も一時には話切れませんし、又私の代になってから、相当細かく取調べた家の芸の伝書も作ってありますが、中に就て『六段目の早野勘平』、『千本桜のいがみの権太』、『伊勢音頭の福岡貢』などは、御好劇家の間にも、『菊五郎三絶』の賞讃を博した演技であり、及ばず乍ら親譲りとして私も再三勤めた事のあるだけ、舞台上の手順にも経験があり、且又口伝も聞いているので、其中の代表的の物として、『六段目の勘平』を選ぶ事にしました。

此狂言は最初寛延元年八月大阪竹本座の操に上演されたもので、歌舞伎に入ったのは後年の事ですけれども、上演の都度に大入^かを歛^かかした事がないと云うのも、前に言った通り時代時代の名優が、其都度の演出に工夫を凝らしたものが、今日に及ぶまでも幾つかの型に残されている訳で、取分け此勘平役の如きは三代目梅壽菊五郎の型に、五代目^{おやじ}が工夫を加えて完成したのものとして、およそ東京の芝居で勘平を演ずる者の、手本とされる事になりました。

尚五代目^{おやじ}の得意芸としては、数多くの世話物を始め、家の芸の幽霊物もあり、更に五代目の為に書卸されて、細かい工夫を凝した物も、少からずありますけれども、それ等は又編中で述べる事にして、とにかく吾々は伝統のある歌舞伎劇を受継いで、団十郎菊五郎の妙技も目のあたりに見ていた事であり、又教え導かれてもいたのですから、此日本の国粹芸術を、今度は次の時代まで無事に送り届けるのが、斯の道に育った私たちの義務であるのと同時に、此種の『歌舞伎』というものを、正しく理解し鑑賞する人々に依って、守り続けられて行く訳ですから^{いささか}聊^か其業ともなるようにと、今ではいいお手本の少なくなっている折柄、一倍此感じの深まるものがあって、敢て此章を設けて見た次第です。

又爰に掲げる『六段目の勘平の型』の一遍は、私の口述を、門弟三世鯉三郎が筆記したもので、世の中へ出すつもりで書いたのではなく、自家の覚え帳である事を申添えて置きます。そうして此記録には、在来『秘事口伝』扱いにされていた工夫等を、^{ことごと}悉^{ことごと}く公開してありますのは、嘗て五代目^{おやじ}が自伝を発表した中に、いがみの権太の条に於て、其浴衣の弁慶縞の寸法を語る所に、『これはまだ家橋（後の羽左衛門）などにも教えないのですが、今度は外の事でございますから、お話をして書て置て後来の役者の為に残して置てやりたいと思えます』と言っているなどに対して、数倍くわしい打明け話になっています

ので、将来勘平役を勤める人の為には、どの位役に立つか知れませし、又役に立てて貰いたいと思えばこそ、全体に渡って一切の手順を細記した訳なので、此点をよく御承知下すって、俳優諸君ならば以下の段取を役の性根に入れて、服用して貰いたく思います。前置が長くなりましたが、それでは前述『五段目の勘平』から此『六段目の勘平』と続けて御覧下さいまし。心覚えの記録ですから、お読づらい処は前以て御承知を願って置きます。

鬘 ・ 甲羅付五分月代袋付。鬘は麻にて結ぶ、後サバク事。

衣裳 ・ 前、お召松坂縞様染物。茶返し菊五郎格子肩入れ。正花色絹通し裏。(但し自分は肥えたる故鼠返しとする)。

後、着付、浅黄羽二重。丸に鷹の羽五つ紋。正花絹通し裏。

帯 ・ 瓦ケ茶袖。(後先キ芯付、一枚芯)

襦袢 ・ 自絞り柳縞(柳しぼり)。付紐付き黒八丈襟付き。

手甲 ・ 脚絆、上締め。下り藍絞り柳縞。(但し下りには両端に小さき「おもり」をつける事)。

手拭 ・ 山道染。

小道具 ・ 鉄砲(種ヶ島)。山刀。草鞋。煙硝筒。下ゲ煙草入。蠟色茶柄の大小(渋紙包として中を麻ノ二枚糸で結ぶ)。以上は音羽屋好みにて、三代目所演より改めし物の由。縞の財布(二個)。敷座。二枚折屏風。黒塗り丸盆。雑茶碗(お軽茶を汲んで一文字屋源六並に勘平に出すもの)。簞(この場は拵え物として手甲、上締めと共に鉄砲に結び付ける事)。火縄。煙草盆二個(一個は源六の用ゆるもの。今一つは木の根に蔓をつけあるものにて勘平の用ゆるもの)。盥^{たらい}。手桶。櫛道具。鏡台。渋団扇。簞を着たる与市兵衛の死骸。戸板。駕等。

在郷の唄にて幕あくと(在郷唄は三座とも異り、一丁目は『隣り柿の木』。二丁目は『村で一番』。三丁目は『麦をついて』を用ゆる事)。お軽少々上手斜を向いて鏡台を据え、櫛道具の「タトウ」を前に置き、髪を結び上げし心にて、鬘などをかきいる体。合方にて下手よりお萱出る。与市兵衛の帰りの遅いのを案じて、背戸まで行きし心にて門口に入る。是より母親とお軽身売りの話になり、お軽「夫のため」と覚悟の事を云う(此の間にお軽は襷をとる料しあり)。合方になる。向う揚幕より一文字屋女房お才、辻駕に乗り、判人源六は尻端折り、合羽がけ、紺の脚絆、麻裏草履の拵えにて出で、判人の案内にて、一文字屋は源六共に家へ入る。お軽は櫛道具をかたづけて茶を入れる支度。母親は此の間に上手〔後に勘平の使いよき所〕へ、敷座を敷いて兩人を招じる。お軽は茶を入れて兩人の前に出す。源六は此の間一文字屋に「よい玉」であろうと目遣い等ある事。源六は合羽がけのまま扇を使い、母親に昨日の仕儀を一ト通り話し、後金の五十両をお才より受取って、母親に渡し、お軽を無理に引立てて駕に乗せ、揚幕に向って花道へかかる時。合

方にて、揚幕より勘平吾妻からげ、草鞋穿き、鉄砲に簍、手甲と上締めまで結びつけたるを、右肩に担ぎ出で（但し父は左肩にて右肩へ担ぎ替える）花道よき処にて駕に出会う。

先ず棒先を左右に除け、トド左手にて棒先を左に寄せ、思わずお軽と顔見合せ

一、やアお軽ぢやないか。お軽「アイこちの人」と云うを聞いて

一、見りやア駕に乗つて何処へ行くのだ。獵人の女房が、お駕でもあるめえぢやアねえか、（ト一寸台詞をモッテ云う）何んであらうと此駕を後へ返せ（ト棒先を突くのを、駕昇きは尚通ろうとするので）エ、返せと云つたら返さねえか。

ト強く駕を突き戻す。合方になり、駕を舞台下手に戻す。源六、お才は駕と一緒に突戻され、お才は源六に突当って、再び勘平の内へ逃込む。お軽は喜び駕より出て家へ入り、母親に夫の帰りを知らせる。源六はお才に突き当って下手へ廻り、思わず前へ出て勘平と顔見合せ「テレ」で引下る。勘平は源六を睨みつけてから門口に立ち、母親に

一、母者人只今戻りました。

ト云い乍ら肩の鉄砲に付けた簍、手甲、脚絆、上締を自分で脱いで門口奥の方に置き、鉄砲だけをお軽に渡す。お軽は受取って重き思入れにて、正面の刀掛けの上段にのせる。次に左肩に掛けた煙硝筒を取って母親に渡す。お萱は之を刀掛けの下段に掛ける、次に山刀を抜いて左脇に置き乍ら、上り口に腰を下ろし台詞になる。此の間にお軽は盥に水を取って側に出す。

一、母者人、昨夜は強い雷でござりましたナ。お前様も日頃から大の雷嫌い故、大方お案じ申した事では御座りませぬ。

一、昨夜の雷は新田の五作の納屋に落ちたさうでござります。

母親「さうして誰も怪我はさつしやらなんだか」と訪ねる間に足を洗い乍ら、一文字屋と種々手真似で話している源六を見る。源六慌てて顔を引込める事あり。

不審の思入れ、

一、ハイよい塩梅に誰も怪我は無いようでもりましたが、五作の家もお婆一人故、さぞ吃驚した事でござりませう。

等と捨台詞を云い乍ら草鞋を脱ぎ、脚絆を取って側に置き、今度は又源六と話し出す一文字屋を見て不審のこなし。盥の中へは左足より先に入れて洗い、手拭を懐中より出して拭く。此時一文字屋を見て手拭を扱き乍ら

一、モシ、母者人、あそこにおいでのお方は、アリヤ何処のお方でムります。

ト尋ねる。母親は一寸返事に窮して「アノお方は、ヤツパリあのお方ぢやわいな」と後ろへ行く。この時お軽は脚絆等の始末を終って、山刀をかたづけに、勘平の左際に来るので、

一、お軽アノお方は。

ト尋ねる。お軽「アノお方は」と云うので、

一、アノお方は。

ト尚問い返す。お軽も困って「やつぱりアノお方ぢやわいな」と山刀を持って後ろへ行

き、刀掛けの二段目に掛ける。これにて勘平愈々不審の料し、手拭を四ツに折り乍ら気味合にて、

一、アノお方は、やつぱりあのお方。アノと云ふ人もあるめえぢやアねえか。

ト時代に云い。此の間に吾妻からげをおろし、着付の前にはねた水しぶきを手拭で払って拭き乍ら、上手へ歩む事。お軽は盥の水を門口にあける。一文字屋との手真似で夢中になっている源六の草履が水に浸るので、源六驚いて飛退く。お軽は詫びる。源六は草履を脱いで、駕の板で草履をはたいて水を切る事等あり。勘平は舞台の真中まで来て、

一、母者人、お前様が折角、洗ふて下された、この着物も昨夜の雨で台無しに致しました。

母親「おゝさうであろう。直ぐに着替へたがよからう」と云うので、

一、左様致しましょう。(ト手拭を立身のまま下に置き、一寸上手の一文字屋を見て) お軽、着物を持つて来るなら御紋付を持つて来てくりやれ。

お軽「アイ」と返事して行きかけると、また呼び留めて、

一、ア、コレ、ついでに大小も持つて来てくりやれ。

ト右手で刀を差す形を示す。お軽「大小には及ばぬ」と云うを、

一、ハテ何であらうと持つて来いと云ふに。

ト意味あり気に云う。お軽「アイ」と返事して奥へ入る。(勘平が紋服と大小を用いるのは一文字屋源六に対する仕科のように誤り伝えられているが、これは前夜計らず出会いし千崎が尋ねて来るのを心待ちに、せめて武士の姿で逢おうと云う用意である) 是を聞いて源六は合羽を脱ぎ、小紋の紋付羽織に着替える事あり。

勘平は帯を解いたまま、左手にて懐中の財布を持ち、裏向きにて、右手にて壁を指し、母親を相手に雨漏りの捨台詞、この中下手舞台の前側に、見物に気付かれぬ様に、財布を落として置き、着付の裾の中に入れた左手で一寸持上げて、財布の居所を動かさぬ様に用心して段々に上手へ廻る。母親が其財布を拾い上げて見るので、周章てて奪い、左手にて左袖に隠し、

一、イエ何でもござりませぬ。

ト笑って紛らす事。此処へお軽は奥より、着物と、正面の戸棚より渋紙包みの大小を持ち添えて出るので、直ぐ裏向になり、袖の財布を襦袢の紐の前にはさみ、着物を着替え、正面に向直って紋を見て右手を左袖口にあて、左手は「袂」の先に入れて紋に礼をする。「ア、これでサバサバした。」等の捨台詞あり、お軽が夫の安否を気遣ったと聞いて、

一、さうであつたか。

と云い乍ら帯を受取って締める(始め帯を解く時、輪形にして置き、二度目に締める時には其輪の中へ入って締める、これは帯で巾を取らぬ用意) 手拭を受取って懐中に入れる。合方とまる。お軽渋紙包みを解き、大小を出し先ず小刀を袖で拭いて渡すので、是を受取って差し、同じく大刀を渡す時、お軽が気遣って抑えるので「大丈夫だ」との思

入れ、尚受取ろうとすると再び控えるのでキツとなり。

一、これには何ぞ深い様子が、母者人（ト母親を見）女房共（とお軽を見、正面を向いて）その様子を聞かうかえ。

トお軽の持つ刀を軽く払って、刀を左へかえして両手にて鑢元を持ち、正面向に形を正す（首は全て二段にする口伝あり）

床々様子聞かうと家の真中どつかと坐れば、ぜげんの源六」で合方にかかる、

ト床の浄瑠璃にて三足前へ進み、威儀を正して衽先^{おくみ}を右手に一寸持って坐り、刀を左側の脇に置く。（すべてこの勘平は、前へ出る件りなど鼻の高き心にて歩めと父より教えられたり）。合方となり、お軽は勘平用の蓑盆を勘平の前に持って行き、次に煙草入を持行き置く。勘平は手拭を懐中より出して右前に置き、煙草入を左の前に置き、是より着物の形を直す心にて両手を懐中に入れ、最前の財布を、後に出し好き内懐中の胸の辺りに直し置く事。夫れより煙草入れを取り、煙管を出して煙草をつめ、一服喫う時分に丁度、源六「何も文句を言はれる覚えは無えぢやムいませんか」となる。是で気付いて、煙管を灰吹にてはたき、「暫く」と云って下手に少し向き、直ぐ母親に、

一、母者人、一円合点が参りませぬ。コリヤどう云ふ訳でござりますナ。

ト一寸右手をついて問い、直ぐ又両手は膝に戻す。母親の話の中、「金の要る様子、娘を売つて金整へ」と云うのを聞いて、一寸一文字屋兩人に気を兼ねる料し。

一、夫れで様子ががらりと分りました。先づ以て親父様の御志（ト両手を膝から下ろして礼をし、左手をあげて右手を下についたま母親に）、お前様の思召し、（ト右手をあげてお軽を見て）女房の親切、忘れはおかぬ、忝けないぞ（トやさしく云う。此所手の置き所を三段に遣う事）。がもう女房をやるにも及びませぬ。チトこちらに好い事がムりました。

ト云うので母親が「シテ其ノ好い事とは」と問うので、

一、其の好い事と申しまするのは、昨夜^{ゆうべ}……（ト云いかけしが、一文字屋兩人に気付き）それは又追つてお話し致しませうが（と源六を一寸見て）、お親父様もお戻りなされぬに、女房は渡されますまい。

ト時代に云う。源六「金で抱へた奉公人が、何故渡されねえんでムいます」と云うので、直ぐ母親に、

一、もし母者人、コノお方は、

右手をついて、母親にその方を指して尋ねるので、母親が「あちら様が一文字屋のお内儀様、こちらがお手代様ぢやといの」と云うので、

一、左様でござりますか。

ト上手に向直る。此時大刀を左脇に持って向直るので、大刀の鞘が小刀の鞘に当って音を立てる。更に小刀をも抜いて左側に添置て礼をする。源六は刀が自分の前に来るので、慌てて飛び退き無気味な科しで、同じく会釈する。勘平は源六の前に両手を突いて、

一、是は是は存ぜぬ事とて、先刻より失礼の段真平御免下さりませ。（ト手を下ろしたま

ま) 何がさて、渡すの渡さぬのと申す事ではムりませぬが、いはゞ親なり、判がゝり、夫りやもう、夜前半金の五十両は、親与市兵衛にお渡しなされたでもあらうけれど、何に致せ余り急な事、母者にもろくろく……………、

ト云い続け様とするのを、源六が打消してしゃべり出すので、手をあげる。源六「……………けれどトおつしやりましたね」と聞かれるので、

一、ハイ左様でムります。

軽く口の中で云う事。源六「五十両といふ大金を踏まうとしなさるのだね」と云われて、

一、イヤ左様な事は決して致しませぬ。

ト再三再四言訳をする。源六はトド「踏むんなら踏んでみろ。」と羽織を脱いで威丈高になるので、相手にならず正面を向いて仕舞う。母親は氣遣って右袖を控えるので、「心配は要りませぬ。必ず腹は立てませぬ故、お構ひなさるな。」との心を手にて思入れ。煙管を取って煙草をつめ喫う。この時源六怒って「サア俺と一緒にうしやアがれ」、と無理に左手を取って引立てようとするので、右手は煙管を口に運ぼうとして源六を見て、一寸強く振り払うので、源六は前へ跟けて驚いて飛びすさる所を、一文字屋が入れ替って、種々と制する事。此の時又母親が袖を抑えるので「安心せよ」と慰める事。お軽は事の荒ら立つを、若しやと氣遣って、最前勘平の置きし大小を手の届かぬ後ろへ運ぶ事。(後勘平が使い好き所に持ち行く事。合方とまる、勘平は煙草を喫んでいゝ。一文字屋は源六を制して、勘平の側に来て、一寸テレて笑いに紛らわして坐る。但し父は此の所で勘平も笑う。合方になり。勘平に挨拶して源六の粗忽を詫びる。勘平は煙草をはたいて、一寸母親に尋ね、改めて上手に向直って両手をつき、丁寧に、

一、是は是は存ぜぬ事とて、御挨拶も仕らず失礼の段、平に御用捨下さりませ。

此の処、父の書抜きには、「是は是は不思議な御縁で、お初に御意得ます。又今日は御遠方の所をようこそお出で下されました」とある。源六への挨拶と同じにならぬ為なるべし。一文字屋は丁寧に挨拶に痛み入り、「どうぞお手をお上げ下さりませ」と頼むので、膝に手を上げる。是よりお才の話になり、トド帯の間より証文を出すので、次の台詞になる。

(この証文は一日おき改める様にする事)

又この間に源六は、以前に脱ぎ捨てた羽織を上手を向いたまま、畳みいる事。

一、アアモシ何と其証文を、一寸拝見出来ますまいか。

ト頼むので、お才は「サアサアどうぞ」と云うので、源六は心配して袖を控える事を先代松助は致したり。お才は「大丈夫だ」と云う心にて、勘平に渡すので、受け取って稍斜めに体を構えて文句を一ト通り読み、

一、どうぞ、ちよつと。

ト下手を向いて母親に、

一、母者人、此印形は親父様の印形に相違ムりませぬか、

ト証文を手渡しして尋ねる。母親は眼が悪いのでお軽に見せて確かめさせ、相違ないと云うを聞いて勘平は証文を受け取り、

一、左様なら親父様の印形に相違りませぬか（ト再び念を押して）。相違りませぬナ（ト是にて再び上手に向直り）成る程、コリヤ親与市兵衛の印形に相違りませぬ。

ト証文を一文字屋に返す。是より不思議の思い入れにて三人寄り添うて、捨台詞にて帰りの遅いのを案ずる科し。トドお軽に、門口にて見ている様に云いつける。お軽は門口にて向うを見て案ずる科し。（但しこの時のお軽の左足が、勘平の右膝と一直線になるよう心付ける事。及び勘平の捨台詞を共に口の中にて云い、その台詞の切れた所にて振向く事。口伝なり）此の中にお才は昨夜の仕儀を委しく話して、トド財布を出し右手に持って話すので、勘平は煙管に煙草をつめ、火をつけて喫い乍ら、左手は右の袖口に入れた形で財布を見て不安の科し。拇指と示指に挟んだ煙管を思わず落とす。一文字屋は話終つて、財布を勘平の左手前に置く。是にて勘平は益々不安の思い入れにて、上手に向き直る。合方とまる。

一、左様なら何とおつしやります。この財布と同じ縞の財布を、アノ親与市兵衛にお貸しなされましたか。

一文字屋「ハイ」と返事をするので、

一、あのその縞と同じ……。と益々不安の高まる科しにて）一寸拝見。

父はこの所を「一寸お見せ下さりませ」と云い、左手に取って見て、愈々慌て出し、

「アノこの縞と同じ縞の財布」と捨台詞にて正面に向き直り、懐中の財布と較べ様として、右手を懐中に入れ様として思わず下手を見てお軽と顔を見合せる。是にて財布をはなして、手を膝に下ろし。

一、お軽茶を一つくれ。

ト呂声に沈痛に云う。お軽「アイ」と返事。床になる。此の時のお軽と見合せる用意として、前述のお軽の左足と勘平の右膝と並べる要ある事。

床^へ側あたりに目を配り、袂の財布引合せば、寸分違はぬ糸入縞。

右の床にて左手の財布を前に投出し、煙管を取り、煙草入れを引寄せて、煙草をつめる仕科。（此の時、煙管を見ずに取る事の出来る様に、煙草入れの根付に煙管をのせて置く事大切なり）、火を付ける形にて、左膝を一寸前へ出して稍下向きになり、左手を懐中に入れて財布を懐中の内より出し、一文字屋に見えぬ様に右手に煙管を稍裏向けて持ち、見較べる形、（煙管の雁首は下げる事口伝なり）。縞柄が同じなので驚き、思わず右手を震わせて煙管で向うを指し乍ら取り落とす。

床^へさては夕べ鉄砲で、打殺したは舅であったか、ハ、ア、ハツと計りに我胸板を、二ツ玉で打貫かるゝより切なき思ひ

ト煙管をとした手で向うを指し、「ハ、ア」で右膝を少し前へ出して、ガタガタ震える科し。此の処お軽が茶を汲んで盆にのせて持ち出るので、右手で無心にこれを取って飲みむせる事。是にて俯向き財布を元の内懐中に入れて、前に置いてある手拭を二つ折り

にして右手にて口に咬え、左手懐中のまま右手の手拭を口から離して、下に手をついて苦しき思入れ。(手拭は右手にて必ず二つ折りの中央を持つ事。後に口より離して四つ折りにして、懐中する用意なり)

床^ゝとは知らずして女房は、

ト是にてお軽は盆を拭き、茶碗と盆を持って下手に行き、上り口に盆の水をあけて片付けて勘平の側に来る。此の間に勘平は口より離せし手拭を、四つにして懐中に入れ、右手はつき左手懐中のまま、お軽が「量見つけて下さんせいな」と云うので、其儘の形にて、

一、サアあの様に云はるゝからは、行きやらずばなるまいわい。

ト云う。お軽「ソリヤ親父様に逢はいでかえ」と云うので思わず

一、イヤ親父様には俺が逢うた。(お軽「エ、」と云うので)俺が逢ふたが、まだまだお帰りの程は知れまいわい。

ト向うを見込みながら、意味深い思入れ。首をうな垂れて両手を膝に置く事。お軽は夫れを聞いて、母親に勘平が父親に逢うた由を伝えるので、母は一寸念を押して一文字屋にこの由を云う。一文字屋は源六に、源六も是を聞いて喜び側へ来て、以前の粗忽を詫び、与市兵衛に逢った由を二度念を押すので、勘平は夫れに答える心持と、思案の心持ちで、面目なげに右手を下に、二段に下ろす事。次に左手は膝に置いて申訳なき思入れに首を垂れている。一文字屋と源六が外へ出る時に、両手を下ろして首をさげ、見物に気付かぬ様に煙管を煙草入れの筒に入れ(吸口の方から入れるのが素直に入る口伝)、後に片付け好い様に、煙草入れの根付を煙草盆の蔓の端に挟んで置く。母親は別の蓆盆を源六に渡してやり、「ドレ支度してやりませう。」で床になり^ゝ母は納戸へ入りにける」と奥へ入る。此の時前の蓆盆を後に置く。(煙草入れも共に捌く。)勘平は上手斜に向き、右手を懐中にして切なき思入れ。懐中より手拭を出し、是を右手に持ち膝の上、左手は右の二の腕にあてて、首をうな垂れて、目をつむりいる。お軽は側に寄ろうとして門口のあいているのに気付き、門口を締めて、手拭を口に咬えるをキッカケにて、合方になり。お軽は勘平の側に来る。お軽の口説きの内にいじらしき思入。(お軽を勤める人に依り、煙草盆を自分で源六に渡し、それをしおに門口を閉める型あり)。母親が床で出るので不憫の料ある事。お軽「さらばでござんす」と立上る時、急に体を下手に向き、両手を突いたまま、

一、お軽待て、

ト急いで止め、お軽は「アイ」と走り寄る。

床^ゝいつそ打明け有のまゝ

トお軽を裏向きに、勘平は左足を立てて、お軽を左手に抱え、中腰になって、右手は手拭を下に置いて、己が口の辺りを指し、仔細を打明け様かとの科。又思い返して、

一、まめでゐやれよ

ト右手でお軽を廻して、下手に力無く突放し、自分はそのはずみで上手向きにどうと泣

き伏し、手拭は前に置いたまま、両手を前に組んで、其の上に首をのせる事。是にてお軽「アー」と泣き落すと、合方にかかり、源六の台詞になり、トド無理にお軽を駕に乗せて、源六の這入りにて、合方とまる。此の間に後見出て勘平の以前の煙草盆を消し、畳の間へ後の拵え道具の鏡と青黛を挟んで入る。源六向うへ這入ると、床の「から二」になり、母親は駕を見送り乍ら門口へ出る。

此の間に勘平は右足を立て、左は膝立ちのまま中腰になって、刀の柄に手をかけた形にて、上手の敷座を巻き乍ら、「とんでもねえ事をしたなア」と後悔の心にて、捨台詞を小さく云い乍ら、巻いた座を一寸刀を持つ形のように取上げて後に消し、又坐って上手向に伏す事。それより母親は勘平の側に来て、種々と慰めた後、お萱「親父殿に逢うふたとは何処で逢ふたか」と尋ねられて一寸ギックリして体を起し、

一、エ、あの親父様にお目にかゝつた処でムりまするか

ト下手向きになる。お萱「親父殿に逢ふた処は」と又尋ねられて、

一、サアそのお目にかゝつた所は

ト云う。お萱に「その逢ふた所は」と重ねて問われるので正面を向き、「その逢ふた所は」と捨台詞になり、

一、淀（ト左手で向うを指し）イヤ伏見（ト右手で指し）タ、タ、竹田……。

トしどろもどろに云い。トド面目なくどうとなる。

床^へ口から出次第滅法弥八、種ヶ島の六、狸の角兵衛、

ト此の中獵人三人、与市兵衛の死骸を戸板にのせて担ぎ舞台奥、仏壇の前に上手を頭に置いて行く。此の有様を見て又ギックリし、此の時に前の手拭を持って上手向に伏す。母親が死骸に近づこうとするので、一寸是をさえぎろうとするが、又そのままにいる事。お萱「コリヤ親父様が殺された」で床の「ノリ」になり「チ、ンチ、ン」で勘平の右足に攔まるので、そのまま体を起して愈々苦しき思入れ。夫れより右足を爪立て、右手を膝から下に落として上手へツ、又左足を爪立て、左手を左膝から落として上手へツ、都合二ツ上手へ居去って上手斜向きになり、合掌して念仏を唱え乍ら其掌を組んだまま下に落して、その上に首をのせて泣き伏す。

床^へ母は泪の隙よりも勘平が側に差寄つて」で、

母親は帯を締め直し乍ら、勘平の側へ来て、お萱「コレ智殿」と云うので一寸体を起し、両手をついている。母親「こゝへおじやと云ふに」で下手を向き、此の時手拭を懐に入れる。此の間に見物の気付かぬ様に、組んでいる右手をずらして胸に入れて、財布を一寸引出して、母親の出し好き所まで出して置く事。

お萱「金受取りはさつしやらぬか」で又ギックリする事。

お萱「云はれぬ証拠は是こゝに」と母親が懐中に手を入れて財布を取ろうとするので、其の手を一度払って裏向きになり、財布を「おなま」に引出して置いてやる。是をお萱が取出すので、今度は勘平が左手で自分の胸を押えて、財布の一度に出ぬ様にしてやる事口伝なり。

とどお萱が右手に財布を持つので、周章てて是を取ろうとあせるが、さえぎられて仕方なく又どうとなる。

お萱「親父殿はそなたが殺した」と云われて、

一、イヤ夫れは、

ト又財布を奪うとするが、取り返せず又伏す。お萱に「道に待ち伏せして親父殿を殺して取った」と云われるので、体を起して手をあげてさえぎり、

一、左様ではござりませぬ。

ト云訳をするが、母親はいっかな聞き入れぬので、又両膝をふり両手を落して泣き伏す。

床^へ遠慮会釈も荒男の、髻つかんで引寄せ引寄せ叩きつけ。

此の床にて、母親は伏している勘平の、髻を掴んで前後に振り、正面にて横に伏し、財布で打たれ、又後へ振られる時、自分で鬘の「セン」を抜いてなげる事。是にて「ガックリ」となる。

床^へ恨みの数々口説き立て、かつぱと伏して泣き居たる。

ト是にて又お萱が打擲して、髻をつかまえて引き据えるので、前向きのまま、痛い思入れにて左手を髻に当てて、右手を下からお萱の手を払うので、母親は払われて下手にどうとなって咳き入る。是を見て驚き、中腰になり、いたわる心で右足を立てたまま、背中をさすろうとするのを、母親は、勘平の右頬へ左手を当て無雑作に押しかけられるので、そのまま右足を前にして上手へ尻持ちをつき、右手を前に出して開いたまま、左手はついて、正面向きに腰を落として、床の^へかつぱと伏して「チヤン」の「チヤン」一杯にきまり、後歎きの形で、肩と手を震わせている。

^へ身の誤りに勘平は、五体に熱湯の汗を流し、畳に喰ひつき天罰を、思ひ知つたる折こそあれ。

ト右手を胸に入れて面目なくもだえる科し。右手は左手の下に組んで一寸身を起し、母親の捨てし財布を見て思わず前に這い出し、此の財布を右手に取上げ、右足を立て左足を膝立て正面を向き、左手は右の袂の口に当てて、口惜しき思入れ。床^へ思ひ知つたる」で財布を下に叩きつけ、「アツ、ツン」で右手を右鬘に、左手を左鬘にかけてかきむしり、前非を悔ゆる科しにて、身をもだえ乍ら、上へ廻って裏向きにどうとなる。此の間に畳の間から拵えの鏡を取出し、顔を青黛にて青くする事。

床^へ深編笠の侍二人」合方になり、

原郷右衛門、千崎弥五郎の兩人揚幕より出で、花道で一寸思入れあり、門口に来て案内をう。

床^へと訪^{おと}へば、折悪しけれど勘平は。」

ト訪いの声に驚き、裏向きのまま体を起し、上手から表へ向直る、

一、只今只今。

ト返事をし乍ら、上手から正面に向直って、右足を立て、右手を右膝に突いて立上がる

うとするが、腰が切れぬので力を入れて、はずんで漸く立上り、着物の前を気遣い乍らかき合せ、前に落ちている財布を見て拾い上げ内懐中に入れて思わず後に跟ける科。此の時懐中に財布をしまう様に見せて、見物に気付かぬ様、財布は襦袢の下肌へ直接に入れて、背中に廻し置く事も口伝なり（後に出す時に血糊のつかぬ為なり）。夫れから、「暫く」と捨台詞を云い乍ら屏風を取って、是を逆にして母親と死骸をかくし、両手を後ろにして屏風を抑え、正面向きになってホットト呼吸つく。此の処に「から二」あり。次に大小を上手から持出て、右足を立てて中腰にて小刀を差し、大刀を突いて立上ろうとして一寸手をやって、乱れし髪に心付き中腰のまま左に刀を横たえて少し抜き、それに写す心にて髪を右手でかき上げ、鬘を直して、襟かき合せ、刀を鞘に収めて刀にはずみをつけて突いて立上り、下手によろよると歩く。此の鏝音を合図に母親は、屏風の中より出て、勘平の行く手をさえぎり、お萱「どこへ行くのぢや」と尋ねるので、

一、母者人、表に誰やら案内がござります。

ト云い乍ら、尚も浮腰にて行こうとするのを、母親は「イヤ逃げるのぢや」と離れぬので、

一、必ず逃げは致しませぬ。暫くお待ち下さりませ（ト云うがお萱は聞き入れず、前へしっかりとしがみ付いて離さぬので）、アア情ないと云う思入れ（母の肩へ手をかけてやさしく）。母者人、其様にお疑ひなさるなら、私のこゝにしつかりと（左より刀を母親の体越しに、右手で鏝元を持って持替えて後に廻し、左手で母親を廻して上手にやり乍ら、母の手を持って腰につかせ）ついておいでなされませ。

ト控えさせる。夫れから「必ず逃げは致しませぬ」と捨台詞を云い乍ら、右手の刀を左に廻し、左足を一步出ようとして、後に引かれる形で、左足を後へ引き、体も左足にかかって、刀は左に差した様にして持ち、右手を柄頭に添えて、立身のまま正面向きにきまるを「キッカケ」にて、

床^へ腰ふさぎ、脇ばさんで出で迎ひ。

ト其儘の形にて母を引ずり乍ら、浮腰で門口まで歩き、門口をあけて二足下り、立身のまま足を割って、少し「ゴザレ腰」にて、右手を行儀よく^{もも}腿の付根に当てて、左手は刀で母親を支える科、兩人に会釈する形できまり、

一、ハ、ハ、ハ、ハ（ト沈痛に笑い）。是は是は御両所には、見苦しきあばら家へ、ようこそ御入来

ト語尾を震わせ乍ら、強いて落付けて言う。郷右衛門「見れば家内に取り込みのある様子」ト云われて、周章してこれに冠せて、

一、ア、イヤ、ずんと些細な内証事、（トキッと云い）。お構ひなくとも、イザ先づあれへ、（ト左足を一寸出し上手を右手にて指す時、母親がのぞくので是を隠す為、左足を引いて、右手を柄頭にあててきまり）、お通り下され。

ト語尾を震わせて沈痛に云う。

兩人「然らば」、

床^へ然らば御免と打通り……二人が前に両手を突き、

で兩人上手に通るを、裏を廻って下手へ来て、母親をなだめて坐らせ、急いで襟をかき合せて、兩人に真向きに、上手横向きにて刀を左側に置いて坐り、両手をついて、
一、此の度、殿の御大事に外れたるは、拙者重々の誤り、申し開かん詞とともござりませぬ。何卒某が科お許し下され、亡君の御年忌、諸家中諸共相勤まります様、御両所の御取り成し偏に願ひ奉る。

床^へ身をへり下りひかへ居る、

で左側に置いた刀を、左手から右手に移し、是を右後ろに置くを、床^へ身をへり」シャランの「シャラン」一杯に置き、床^へくだアアリイイ」一杯に、下褌を襟元から、右手にてしごき下ろし乍ら、右膝を上げ、右足を引いてトンと下ろし、両袖を手にて払って、両手を右から下ろし、左手も下ろして揃え、首を右から振って平伏してきまる。

床^へ郷右衛門取り敢ず、

で郷右衛門の台詞になり、「金子は封のまゝ差し戻さる、ソレ弥五郎殿」にて、弥五郎「心得ました」と床になり床^へ言葉の中より弥五郎、懐中より金取出し、勘平が前に差し置けば、ハツと計りに気も転倒。

で弥五郎金子を勘平の前に置くので、体を起して吃驚り転倒する。

床^へ母は泪と諸共に、

母親下手から出て、「今と云ふ今親の罰思ひ知つたか。皆様聞いて下され。」と事の仔細を話そうとするので、始めは手で畳を叩いて制するが、尚聞かぬので、後ろへ刀を押しやって、右手に懐中の手拭を取出し、母親に近付いて、手拭で口を塞ごうと争うが、トド勘平は兩人を兼ねて上手向きになり、「イヤ何でもムりませぬ」と捨台詞にて打消し困り居る体。お萱に「親父殿を殺して取つた金ぢやもの」、と云われて面目なき科し。

終にどうとなって困り果てて居る、

床^へ聞くに驚き弥五郎刀おつ取り、勘平が側につめ寄つて、

ト弥五郎怒りの気色鋭く、立上って刀の^{こじり}鑑にて勘平を入れ替え、下手に刀を立てて、右膝に手を置いて台詞になる。此の弥五郎に入れ替えられる時に、後に用いる都合よき処へ、右手から手拭を落して置く事。

弥五郎「イヤサ、この則安は申さぬぞ」で、恐縮して一度身を起して、更に平伏する。

弥五郎「拙者が手の中振舞ふか」と、弥五郎立上り、立身のまま刀を構えて裏にかかった形で、斬り付け様とするので、右手で是を支える科、郷右衛門は弥五郎を制して、

「コリヤ勘平、それへ出い、それへ出い」で上手に向直り、「コリヤ勘平、おみや（と扇を下に置き）どうした者ぢや。」とキツと云われて、益々恐縮の事。それから郷右衛門、「亡君尊霊の御恥辱と、心が付かぬか、うつけ者めが」で、又一寸体を起して恐縮の体で平伏する事。「弥五郎殿最早立帰りませう。」と兩人怒って、立上り帰ろうとするので、周章てて下の弥五郎を入れ替えて、

一、暫く暫く。

ト両手にて兩人を支え、更に又弥五郎が、勘平を除ける体で入れ替わるので、直ぐ弥五郎の刀の^{こじり}鐙を掴み、次に郷右衛門の刀の鐙を、左手に握って中腰になり、正面向きにて、

一、暫く暫く、御両所暫くお待ち下され。亡君尊靈の御恥辱とあらば、一ト通り申し開き仕らん。(両手を動かして兩人に頼む様な心にて、刀を動かし乍ら)サ武士の情ぢや御両所共、お下に坐つてまづまづ(兩人刀を払おうとするをグッと引いて抑えた形にきまり直し)、お聞き下され。

ト語尾を張って、上げていた右膝を落して沈痛に云う。兩人「申す事あらば早く申せ」、と刀を払ってせき立てるので、払われて手をつきたるまま「暫く」と云い乍ら、兩人を手にて制し乍ら、下向きに弥五郎の方へ向き直り、弥五郎を指さして、

一、夜前貴殿にお目にかゝり、別かれて帰る道々も、金の工面に兎や角と、心も暗きくら紛れ、山越す猪に出会ひ、二ツ玉の強薬、切つて放てばあやまたず、確かに手応へ(ト鉄砲を持ちたる仕方をする)。駈け寄り見れば猪にはあらで旅人(正面を右手にて指すが直ぐ)、ナ、ナ、南無三。(ト両手を膝にして、右手で着物を掴んで口惜しき思入れ)。薬は無きかと懐中を探り見れば(ト両手にて畳の上を探る仕科)。手に当つたる金財布、(ト是にて以前の落とした手拭を取って、金包みの様に、両手にて丸めて持ち)。道ならぬ事とは知り乍ら、天より我に与ふる金、か、で先ず天を見る科。手拭で拵らえた金包の目方を計る科を「か」に合やす事。直ぐに手拭を前に置いて、下手の弥五郎の方に向い指さして、「何にもせよ貴殿に追ひつき、御手渡し仕り、徒党の数に入つたりと、悦び勇み立帰り、(是にて正面向き)。様子を聞けば情なや(テチン)、金は女房を売つた金、(ト苦しき思入れにて左手を懐中に入れ)。打ち留めたるは、(ト右手も懐中に入れる)。

兩人「打ち留めたるは」と追求するので、直ぐ双肌を脱ぎ、右足を立てて左を膝立ちとなり、腰の小刀を抜くより、中身を自分に向けたまま、右手に柄を持ち、左手の鞘の方を後ろへ引いて抜き取り、鞘を後へ抛ると同時に左手にて刀の身を手拭を拾って掴み、右手も上から添えて、左の脇腹に突き立てる。

一、鼻どの。

ト云い乍ら後へ倒れる。是にて腹に血糊をして、兩人が抱き起し、左右から兩人「ヤ、何と」と云うと、床で「ツンツ、」と弾くので、一寸中腰になって意気張るが、直ぐ苦しさはどうとなつて苦しむ仕科、この右の三味線の「ツ、」から下にとって、篠入りの合方になる。(後ろに倒れし時「サバキ」の栓を抜く)。

一、如何なればこそ勘平は、三左衛門が嫡子と生れ、十五の年より御近侍勤め(ト時々息をつき、腹を切っている心にて、すべて腹の皮を背中につける心にて、台詞を云う事口伝なり)。百五十石頂戴致し、代々塩谷の御扶持を頂き、束の間御恩を忘れぬ身が、色に(ト一寸兩人に恥かしき心にて云い憎くなり、息をついて)。色に耽つたばかりに、大、大事な場所にも居り合さず、ア、おん、御仇討の連判へ、加はりたさに調達の(ト一生懸命に加盟した心にて切に云う)。金も却つて石瓦、^{いさか}鵜の嘴と喰ひ違ふ、言訳なきに勘

平が、切腹なして相果つる、心の中を御両所方、御推量下さりませ。

ト泣き乍ら一部始終を物語る。此の間に「言訳なきに勘平が」で右手にて顔を指し、血糊のつきし手（右）にて、右頬をはたいて血をつける事あり。「御推量下さりませ」にて、又下にどうとなる。

床^へ血走る眼に無念の泪。

で起上り右手を刀にあて、次に兩人にその右指で、自分の顔を指して見せ、正面向きに無念の科し、又どうとう伏す。床^へ仔細を聞くより弥五郎」で千崎は与市兵衛の死骸に近づき、刀の^{こじり}鑑で簀を徐け、死骸を改めて、「これ見られよ郷右衛門殿」となり、郷右衛門の長台詞の後、兩人勘平の左右に来て、兩人「早まつた事致したナ」迄は、下に居て苦しむ事。

床^へ云ふに手負ひは見て吃驚り。

一、どうれ。

ト苦しき中に起き上り、行こうとするが動かれぬので、弥五郎が後ろから抱いて助け、勘平は左手をつき乍ら上へ廻って裏向きになり、死骸の側までいざりよる。此の時に「サバキ」の糸を、弥五郎が外してやる事。又血綿を手を持って前へいざり出る事。此の間絃は^へチチンチチン」を弾き、勘平が死骸を見て「ムウ」にて床になる。

床^へ母も驚くばかりなり」。

でお萱「堪えて下され勘平どの」と泣いて詫びるので、

床^へ泣き詫びれば顔振り上げ。

で下手へ右手をついて、母親に、

一、母者人、お疑ひは晴れましたか（ト母に云う。お萱「オイのう」と云うので安心して、上手に向おうとするが、足が自由にならぬ科にて、右手にて膝を折り乍ら上手に向直り、苦しき思入れにて、右手を膝に置いてかしこまり）、御両所お疑ひは晴れましたか。

ト尋ねる。兩人「いかにも疑ひ晴れ申した。」と云うの聞いて、

一、エ、忝けない。（ト体をくずして、右手で拝む科）。母者人、（ト少し下手向きになり）。親父様の御最期も、女房が身を売つたも（奉公も）、決して反古にはなりません。この金子、一味徒党の御用金早く早く。

床^へ云ふに母も泪乍ら、財布と共に二夕包、二人が前に差出せば。

ト右手で金子を早く兩人に差し上げてくれるようにと頼む科、此時以前背中に入れ置いた財布を、右袖から出して母親に渡す。お萱は、一文字屋の置いて行った金と、弥五郎より戻りし金子を、財布の上ののせて、兩人の前に差し出す。是よりお萱、原、千崎の台詞になり、弥五郎「あと懇ろに弔はれよ」とお萱へ財布の金子を返し、原の差図にて、五十両包を一つ懐中に入れる事。それから原、千崎の兩人勘平の側へ来て、^{かみしも}上下から挟んで郷右衛門、「仏果を得よや」、兩人「早野勘平」と耳の側にて大きく云うので、

一、仏果とは（ツン）、穢らはしい（ツ、ハ、ハ、ン）、死なぬ、死なぬ、死にませぬ。

「仏果とは」を強く云って、「ツン」で苦しき心にて、「穢らはしい」と時代に云う。

「死なぬ死なぬ」で苦しみ乍ら、少し首を振り「死にませぬ」と覚悟を示す様に首を振る。

一、魂魄此の土に留まつて、敵討の御供せいで置かうか。

床^へ突込む刀引廻せば。

ト強い覚悟を表わす様に、凄く言い放って、右手を刀にかけて、引廻そうとするので、郷右衛門「ヤレ待て勘平早まるな、今端の際に汝に見する一ト品あり」と千崎と兩人にて、手を留めるので、又下に伏してこれを聞く。郷右衛門は弥五郎に門口を見張らして、

床^へ懐中より一巻取出し、さらさらと押開き、

ト郷右衛門懐中より一巻出し、是を左手に持ち、右手を勘平の肩にかけて、「……一味徒党の連判状」、と云うので、床^へツツツ^{ゝゝゝ}となり、

一、して、姓名は、誰れ誰れなるや。

ト「ツツツ^{ゝゝゝ}」で、急に起き直って、郷右衛門の方へいざりより、前の台詞を云う。郷右衛門「一味の数は四十五人」で一寸うなずき、郷右衛門「今又汝を差し加へ、徒党の人数は四十六人」で「ウン」と嬉しき思入れにて、うなずき乍ら「ニツタリ」して、「是を冥途の土産に致せ」、で又がっくりとなる。

床^へ用意の矢立取り出し、姓名を書き記し。

で郷右衛門、腰より矢立を取り出し、連判状を開いて、鉄扇と矢立を重しとして、手早く「早野勘平」と書き記し、兩人にて「早野勘平」と耳元で云うので起上り、

一、心得た。

ト呼吸も絶え絶えに云う。

床^へ心得たりと、腹十文字に掻き切つて、臍を掴んでしつかと押し。

ト右膝に右手を添えて、苦しき息の中に坐り直す。此の時勘平の膝の刀の前より、郷右衛門連判状を下手へ拡げてやる。弥五郎その一端を持つ事。^へ腹十文字」で刀を左から右へ廻して、一寸上へ上げる事。是にて十文字の切腹の作法となる事。次に苦しみ乍ら、刀を前に抜いて、左手にて臍を掴み出す科。左手先も震えて、眼もくらみいる体なり。郷右衛門、此左手に手を添えて血判させ、急いで連判状を取り、懐紙にて血を抑える事。是にて勘平又下にどうとなる。

郷右衛門「血判確かに受取つたぞ」で、

床^へ哀れ（本釣鐘）果敢なき。

で本釣鐘になり、又体を起し、兩人に後事を頼む科し。次にお萱に、お軽の事等を右手にて拜む様に頼んで、「果敢なき」で手拭に巻いた以前の刀を取って、右手前に柄を下にして立て、自分は中腰になって、左手も是に添えて、「ツツツツツツ」で、咽喉の方へ刀を持って行って、咽喉^い笛を切り、「エえ」と引く呼吸と一所に刀を離して腰を落し、両手を合掌するを木の頭、床の三重にて、手を段々に指を一本づつ組み合せて落入り、になり、母親が裏から抱く膝に乗りかかって行く。郷右衛門、弥五郎は下手にて

立身のまま、片拝みの科しにて。

拍子幕。

これで一順の事は尽くしてありますが、私の代にならない古い時代の手順、又興業の度毎に多少工夫を付替える事もあった訳で、それ等の説明には幾分洩れた所もありますが、其辺は予め御承知置き下さい。尚私共音羽屋の家の芸以外にも、勘平の型はありますけれども、それは爰へ記しません事もお断りして置きます。